

答 辞

春の光が天地に満ちる、令和五年三月のこの佳き日、わたくしたち専門科二七五名は、卒業式を迎えることができました。新型コロナウイルス感染症の混乱の中、卒業式挙行に向け準備を進めてくださった、佐久間校長先生をはじめ、諸先生方、職員の皆さま、ならびに関係する全ての方々に、卒業生を代表して、心より御礼申し上げます。

わたくしたちは三年前、それぞれの志を胸に、ここ、千葉経済大学附属高等学校へ入学しました。しかし、前年から新型コロナウイルスが流行し始めたことで、わたくしたちの高校生活は、自宅学習からスタートすることとなりました。今まで経験したことのない世界的な混乱に戸惑い、不安を抱えながらも、まだ見たことのない友人や先生方を思い、課題に取り組む日々を過ごしました。六月から分散登校に切り替わり、延期されていた入学式も放送で挙行されたことで、ようやく高校生になったことを実感しました。そして、クラスメイト全員揃って授業を受けられるようになると、部活動も始まり、新しい友人が少しずつできました。

一年生では、ほとんどの行事が中止となり、非常に残念でしたが、二年生以降は、少しずつ実施されました。声援をひかえながらクラスの仲間を応援した陸上競技会。例年より規模を縮小しての開催となりましたが、生徒会役員として、準備や運営に奔走した文化祭。普段の学校生活とは違う、貴重な体験ができた、一泊二日の宿泊行事。こうした行事は、どのような形でならば行えるかと、先生方が考えてくださったおかげで実施されることになり、高校生活の大切な思い出となりました。

専門科の学びでは、初めは「商業」や「情報処理」が、具体的に何を学習するものなのかわかりませんでした。しかし実際には、「商業科」では「簿記」や「経営」を学び、模擬株式会社を設立したり、「情報処理科」ではパソコンの基礎的な操作方法や、情報モラルなどを学ぶことで、これからの社会で生きていくうえでの専門的な知識や技術を実践的に身につけることができました。中でも、専門科の授業で印象に残っていることは「プログラミング」です。自分でプログラムを入力し、正しく実行されたときは、達成感がありました。また、検定試験に向けて、わからないところを友人と教え合っ

たり、放課後に補習を受け、日々努力しました。自分一人の力だけでなく、支えてくださった先生方のお力添えがあったからこそ、数多くの検定に合格することができたのだと思います。

こうした日々はまさに、本校の建学の精神である「片手に論語、片手に算盤」のようでした。論語の章句で、「朋あり遠方より来たる、亦楽しからずや」と述べられた、友と学ぶ喜びや、「算盤」にあたる知識や技術を、授業や検定で身につけた嬉しさを、感じてきました。高校生活で培ってきた全てのことを、これからの人生で発揮し、将来必ず、他人の役に立ち、社会に貢献できるような立派な大人を目指していきます。

この三年間、わたくしたちは、新型コロナウイルスの影響で今までの日常が奪われ、やるせない気持ちになる一方で、大切な仲間と普通に過ごせることのありがたさに気づかされました。また、わたくしたちの高校生活は、「この限られた中で今できることは何か」を常に問い続けた三年間でした。しかしだからこそ、今という時を大切に過ごした三年間となりました。学校生活では様々なことに悩み、苦しむ時もありましたが、家族や友人、そして先生方に支えられながら逆境を乗り越えてきました。高校生活での経験や学びを糧に、わたくしたちはきっと、卒業してからも様々な困難を克服する力を獲得したと信じています。そして、各々自分で選んだ道を、輝かしい未来へ向かって、羽ばたいていきます。

最後になりましたが、今までわたくしたちを支えてくださった全ての方々に感謝申し上げるとともに、千葉経済大学附属高等学校のさらなる発展と皆様のご健勝をお祈りし、答辞と致します。

令和五年三月四日

専門科 卒業生代表 嶋崎 優奈